

学習障害の疑い・診断に対する反応

— 自分の高校生時代を仮定した大学生を対象に —

○衛藤裕司

(大分大学 教育学部)

KEY WORDS: 高校生, 学習障害, 疑い・診断への反応

I. 目的

学習障害は、本人にとっても周囲の人にとっても見えにくい障害である。小学校・中学校段階で気づかれぬまま高校生段階を迎えることも少なくなく、また、疑いがあることに気づいたり、医療期間で診断を受けても、高校生本人がどのような捉え方をするのか不明な部分も多く、本人に告げることを躊躇することもしばしば見受けられる。本研究では、その基礎的資料の1つとして「自分の高校時代を想定して」という仮定の条件のもと、大学生1年生を対象に、学習障害の疑いや医学的診断に関する反応のアンケート調査を試みる。

II. 方法

1. 対象者

対象者は、A 大学教員養成学部1年生に在籍する大学生98名 (男性33名, 女性65名) であった。

2. 質問紙

質問紙に記された質問項目は以下のようなものであった。質問項目1「学習障害のチェック・リスト等で偏りがあった時、教師から告げられたいですか」、質問項目2「1の理由はなぜですか」、質問項目3「病院で詳しく調べるよう言われたら行きますか」、質問項目4「学習障害があると診断されたら、人に言いますか」、質問項目5「誰に言いますか」、質問項目6「質問5の人に期待することはどのようなことですか」、質問項目7「保護者以外には誰に言いますか」、質問項目8「どのように声をかけてほしいですか」、質問項目9「絶対に知られたくない人は誰ですか」、質問項目10「質問9の理由はどのようなものですか」、質問項目11「どのくらいショックですか (5段階尺度)」、質問項目12「一生治らないことに対して、立ち直るために必要な期間はどのくらいですか」、質問項目13「自分が一番大変そうなところは、どのようなところですか (困難領域)」、質問項目14「強い (得意) と感じる領域はどれですか」、質問項目15「弱い (不得意) と感じる領域はどれですか」

回答の仕方は、質問項目11以外のものは自由記述であった。なお、質問項目11においては、「5=全くショックである」、「4=かなりショックである」、「3=ショックである」、「2=ちょっとショックである」、「1=全くショックでない」の尺度のうち、最もあてはまるものを評定させた。

この質問紙はA4用紙を縦使用・横書きし、左上が綴じられていた。

3. 手続き

学習障害に対する90分の講義を受講し終えた対象者に対し、口頭で研究の趣旨(「自分が高校2年生であった時に、これらの質問をされたらどのように答えるのか?という前提で回答すること)・倫理的配慮・回収方法に関する説明を行い、同意を得られた者に対し、質問紙が配布され記入が依頼された。所要時間は平均20分程度であった。

4. 結果の分析方法

各質問項目で自由記述された回答をKJ法(川喜多, 1967)により分類し、それぞれの分類に対し命名を行った上で、それぞれの回答数を算出した。

III. 結果

1. 高校実施のチェック・リスト等で発達の偏りの可能性がある場合の反応

1) 発達の偏りの可能性がある場合、「教師から告げられたい」と回答した者は、93人中、78人(83.9%)であった。
2) 「教師から告げられたい」と回答した者は、その理由に「不安の低減のため(30人, 38.5%)」、「改善を目指すため(34人, 43.6%)」、「進路決定に活かすため(10人, 12.8%)」、「他人に知ってもらいたい(2人, 2.6%)」、「知らずに恥をかきたくない(2人, 2.6%)」をあげていた。
3) 1)のうち、「勧められれば医療機関を受診する」と回答した者は、63人(80.8%)であった。
4) 1)のうち、そのことを「人に話す」と回答した者は69人(88.5%)であり、相手は、①母親(52人, 75.4%)、②父親(9人, 13.0%)、③担任(3人, 4.4%)、④兄弟姉妹(2人, 2.9%)、⑤友達(2人, 2.9%)、⑥祖父母(1人, 1.5%)という順であった。

2. 医療機関で正式に医学的診断を受けた場合の反応

1) 「かなりショックである」又は「全くショックである」と回答した者は49人(52.7%)であった。「ちょっとショックである」又は「ショックである」と回答した人42人(45.1%)であった。
2) 全対象者93人中、このことを「母親に話す」と回答した71人(76.3%; (人に話さない」と回答した者2名を含む)のうち、期待したことは、①「今後のことを一緒に考える」21人(29.6%)、②「障害理解への協力」14人(19.7%)、③「励まし・共感」14人(19.7%)、④「かわらないでほしい」13人(18.3%)、⑤「素直な気持ちを教えてほしい」1人(1.4%)の順であった。
3) 医療機関を受診すると回答した63人が、正式に学習障害の医学的診断を受けた場合、立ち直るのに必要と予想した期間は、「0~1か月」が28人(44.4%)、「2~3か月」が11人(17.5%)、「4~6か月」が14人(22.2%)、「7~12か月」が6人(9.5%)、「13か月以上」が4人(6.4%)であった。

4) 正式に学習障害の医学的診断を受けた場合、「人に言う」と回答した者は80人(86.0%)であった。そのうち、「親しくない友人には知られたくない」と回答した者は40人(50.0%)で、その理由として、「いじめられる」が15人(37.5%)、「広まる」が8人(20.0%)、「理解がない」が3人(7.5%)、「色眼鏡で見られる」が9人(22.5%)、「恥ずかしい」が2人(5.0%)、「いう必要がない」が3人(7.5%)であった。

IV. 結果

大学生に、高校生2年生である自分を想定して学習障害の疑い・医学的診断に関する反応を訪ねた結果、3分の2程度の対象者が医学的診断に関する告知を希望していた。結果を話す相手は母親が最も多く、「今後のこと」、「障害理解への協力」、「励まし・共感」等が話の内容として希望されていた。

(ETO Hiroshi)